七三一部隊長・石井四郎の日本文化講義：金沢大学医学部所蔵金沢医科大学資料から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000073

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



研究ノート

七三一部隊長・石井四郎の日本文化講義

――金沢大学医学部所蔵金沢医科大学資料から――

古畑　徹

一、はじめに

筆者は、金沢大学五十年史編纂委員会の専門委員として、『金沢大学五十年史／通史編』（金沢大学創立五十周年記念事業後援会、二〇〇一年）の第三章第一節「戦時体制前後の前身各校」の執筆を担当した。そのため、一九九八年夏より数度にわたって、金沢大学医学部倉庫内に所蔵されている金沢医科大学[1]（以下、金沢医大と略称）の資料を調査した[2]。その結果、そこには貴重な高等教育史の史料が多数存在していることが確認されたが[3]、その中に七三一部隊に触れる史料が数点存在していることも明らかとなった。

『金沢大学五十年史／通史編』では、この調査で見つかった史料を利用して、七三一部隊と金沢医大との関係についていくつかの指摘を行ったが、紙幅の都合もあって史料自体を紹介することができなかった。本稿では、それらの史料のうちから、七三一部隊長・石井四郎が一九四一年四月二一日に金沢医大で行った日本文化講義についての史料一九点を紹介し、合わせてそこから窺える七三一部隊人脈及び日本文化講義の在り方についてのいくつかの問題を明らかにしてみたい。なお、史料は本文の最後の五章にまとめて列挙したので、その旨ご了解願いたい。

二、従来の研究で知られる七三一部隊と金沢医大の関係

史料を紹介する前に、今までの諸研究によって明らかに

された七三一部隊と金沢医大の関係を整理しておきたい。

まず、七三一部隊関係のほとんどの著書に登場するのが、金沢医大教授であった石川太刀雄である[4]。彼は、京都大学医学部から最初に七三一部隊に派遣された八人の若手研究者の一人で、一九三八年三月に陸軍技師という軍属身分で七三一部隊に任官した。七三一部隊では、ペスト・流行性出血熱等の研究に携わるとともに、病理解剖を担当した。一九四三年七月、金沢医大第二病理学教室教授になって「内地」に戻ったが、その際、自らが作成した八〇〇〇枚に及ぶ病理標本を持ち帰った。戦後、アメリカ軍による七三一部隊の調査の過程でこの病理標本の存在が明らかとなり、一九四七年に石川は金沢でそれを引き渡すとともに、アメリカ軍のために解説を作成した[5]。彼は、新制金沢大学医学部発足後も第二病理学教室教授として留まり、一九七三年に退官した。この間、日本学術会議会員に選ばれている。

金沢医大出身の七三一部隊員として知られているのが、二木秀雄である。彼も陸軍技師という軍属で、結核及び梅毒研究の班を率いた。ただし、彼の入隊経緯については今までほとんど研究がないようである。

七三一部隊は、部隊長・石井四郎が作った防疫給水部のネットワークである「石井機関」の一角であったことが近年明確になってきているが、このネットワークの要の役割を果たしたのが、東京・戸山にあった陸軍軍医学校防疫研究室である。防疫研究室には嘱託研究員の制度があり、各大学の医学部教授を嘱託研究員にしたことが七三一部隊における人的資源確保に大いに役立ったとされ、また医学部教授たちも嘱託研究員となることで多くの研究費・研究資材及び各種研究情報を獲得できたといわれる。金沢医大教授で唯一この嘱託研究者であったことが知られているのが、谷友次である[6]。彼は金沢医大細菌学教室教授で、一九二三年に着任後、梅毒研究に多大な業績を残した。新制金沢大学医学部発足後、教室は微生物学教室と改称したが、谷は教授として留まり、医学部長も務め、一九五九年に退官した。

以上が、今までに知られている金沢医大と七三一部隊との関係である。石川の存在が大きいために印象は鮮烈だが、あくまで個人と七三一部隊との関係しか確認されておらず、金沢医大としての組織的関与は確認できていない[7]。

三、日本文化講義について

石井四郎が金沢医大で日本文化講義を担当したときの史

料は、すべて『文化講義関係書類』という簿冊[8]に含まれている。かつて『金沢大学医学部百年史』がこれを使って金沢医大における日本文化講義の概要を紹介しているが[9]、現代史及び教育史的な関心から書かれていないため、解説としては不十分である。既に筆者は『金沢大学五十年史／通史編』において、安岡寿之輔・中村治人などの研究[10]や金沢大学医学部所蔵金沢医科大学資料中の日本文化講義関係の諸書類に基づいて日本文化講義の解説を行ったが[11]、論を進める都合上、ここであらためて簡単な解説を施しておく。

日本文化講義は、一九三六年度から四五年度にかけて、学生生徒の思想対策、高等教育機関における国体明徴施策として、帝国大学を初めとする直轄諸学校に対して文部省統制下で実施された、極めて特異な講義である。一九三六年一〇月の教学刷新審議会答申において高等教育刷新の目玉として提案されたものだが、文部省は既にこれを先取りして、従来から学生生徒の思想善導のために行われていた特別講義を拡充強化することを決め、一九三六年七月に思想局(のちの教学局)から実施要綱を通牒した。

要綱によると、その目的は、日本文化に関する講義を課して国民的性格の涵養と日本精神の発揚に資するとともに、日本独自の学問・文化を理解体認させる点にあり、そのために講師選定は、国体・日本精神の真義を明らかにして教学刷新の目的を達するのに適当な人物を選び、文部省に合議して決定することになっていた。回数は、直轄諸学校(高等学校・専門学校など)年五回、官立大学年四回、帝国大学年三回で[12]、毎回二時間とされ、必修科目に準じることとされた。講義終了後には、講義の速記録だけでなく、講義名及び演題、講義要旨、聴講生徒数並びに出席率、生徒に与えた影響などを速やかに思想局長宛てに報告することになっていた。あとで紹介するように、『文化講義関係書類』にはメモの類まで残されているが、このことは詳細な報告が要求されていたことと無関係ではなかろう。

この要綱に基づいて、一九三六年度後半に予定されていた特別講義は日本文化講義に名称変更して実施され、一九三七年度から要綱に基づく日本文化講義が本格実施となった。以後、各高等教育機関では毎年確実に実施され、それは一九四四年の学徒の通年動員実施後も、さらには一九四五年の戦時教育令下においても継続された[13]。文部省が高等教育機関における思想教育の柱としてとして日本文化講義を極めて重視していたことは明かであり、教育史研究者は実際に高等教育機関に軍国主義思想を浸透させていくう

えで、これが重要な役割を果たしたと理解している[14]。

四、石井四郎の日本文化講義関係史料解説

本題の七三一部隊長石井四郎の日本文化講義について、これから史料の紹介と解説を行うが、論稿の体裁としては解説を先にし、史料を五節として後にした。それ故、本節で挙げる史料番号は五節の史料番号なので、ご了解願いたい。また、諸史料の漢字字体は本来旧字体や略字が混在しているが、印刷等の都合を考え、すべて常用漢字に直した。この点もご了解願いたい。

史料1は「日本文化講義実施計画書」である。日付はないが、昭和一六年五月一日付の「昭和十六年度日本文化講義実施計画ニ関スル件」に続くので、このときに作成された文書のようである。ただ、そのように考えると、石井の講義は既に四月二二日に行われているから、計画書というのはおかしな感じがする。実は、「日本文化講義実施計画書」はもう一つ、昭和一六年四月一日付のものが残されている。これには石井の名はなく、第一学期に「青木保(東京帝大教授)兵器ノ話」が予定されていた。ところが、『文化講義関係書類』に収められた昭和一六年四月一八日付の教学局指導部長から金沢医科大学長宛の電信には、「第一回日本文化講義講師青木氏ハ出講不能ニツキ代ハリノ講師」を至急回答されたいとある[15]。つまり、青木の都合が悪くなったので[16]、急遽大学側が石井に依頼して計画を変更したのである。しかし、計画書類にない講義を行うわけにはいかないので、差し替えの「日本文化講義実施計画書」が作られたのである。なお、五月一日付の「昭和十六年度日本文化講義実施計画ニ関スル件」には「追テ石井四郎陸軍軍医少将ヲ講師トセル第一回日本文化講義ハ客月二十一日実施済ミニ有之候條申添候」という付記がある。

史料2は、史料1に糊付けられていたメモである。二枚あり、いずれも「金沢医科大学」の名前入りのメモ用箋に書かれ、どちらにも金沢医大の光島学生課長の印が押されている。一枚目はタクシー代についてのメモであり、二枚目は石井の講師控室での接待費用についてのメモである。これは史料1が実際には実施後に書かれたものであることを裏付けている。なお、石井が宿泊した宮保旅館は当時柿木畠にあったが、現在は廃業して建物も現存しない[17]。

史料3・4はいずれも予算書だが、日付がない。史料3については手書きとタイプ打ちの二種類のものが存在し、史料4は手書きである。この両者の石井の講義経費が大きく異なっているが、実は予算書はもう一つ存在し、これに

は当初予定していた青木保の名前があり、石井の名前はない。これと史料4の予算書を比べると、青木の名前を石井に変更しただけであることが判明する。とすれば、史料3は史料4を実施後に実際の費用に合わせて変更したもので、そのことは史料3の雑費が史料2と一致することからも証明できる。史料3は手書きが下書きで、タイプ打ちが文部省提出書類の写しであろう。史料3からは、石井の講義は軍医学校からの派遣の形態をとったこと、後述のように石井の講義には映画が上映されたが、その映写機や映写技師は石井自らが用意し同行したことがわかる。

史料5から9は、実施直前の石井側と大学側のあわただしいやりとりの様を示す史料である。史料5・6は大学が受け取った電報、史料7は簿冊綴じ込みのメモ、史料8・9は手書きの電信案である。電信案は電文に直すために、普通の文案の右にカタカナが振られている。史料5によれば、石井の内諾を得たのが四月一六日で、確定が一七日であるが、史料5は二木秀雄から谷友次への電報であることから、その数日前に谷から二木を通じて石井に依頼がなされたものと判断される。このとき、二木から陸軍軍医学校に派遣を依頼するよう指示があったようで、金沢医大としてその依頼電を出すための下書きが史料9、二木への指示のお礼電の下書きが史料8である。そしてその二木の指示に関係すると思われるのが史料7のメモである。メモの執筆者は不明だが、光島学生課長の印があるので、彼かその周囲の事務官の作成であろう。このメモは、軍医学校に派遣を懇請する件が「至急電報デ」とあるので史料8・9を作成する前のものである。他にも詳細な指示があるので、一七日におそらく二木から確定の電話があり、その折に各種指示があったものを書き留めたメモと推測される。これらを総合すると、四月一六日前に依頼、一六日内諾、一七日確定・軍医学校への派遣依頼、一九日石井から到着時刻確認の電信、二一日実施という時間経過が復元できる。

ここで注目しておきたいのは、講義設定の仲介役が大学側は谷友次、石井側は二木秀雄だという点である。従来の研究では知られていないようだが、二木は一九三六年三月から一九三七年一二月まで、谷の下で金沢医大細菌学教室講師を勤め[18]、それをやめて陸軍技師になった[19]。つまり、谷と二木は師弟関係にあったのである[20]。七三一部隊が若手研究者を集めるに当たり、石井機関の嘱託研究者が優秀な弟子を送り出したといわれているが、嘱託研究者であった谷が送り出したのが二木だったのである。

実は、金沢医大の教授陣で石井機関と関係を持ったのは、

のちに教授となる七三一部隊出身の石川太刀雄を除けば、谷一人しか確認できない。金沢医大は、石井の出身校である京大医学部のような、七三一部隊との大がかりで組織的な関わり方はしていない。そうした中で谷だけが嘱託研究者となり得たのは、石井との個人的な関係によるとみるべきであろう。谷と石井はともに第四高等学校理科乙類の大正五年の卒業生、つまり同期同級なのである[21]。どの程度の親交があったかを示すものは今のところ見つかっていないが、関わりのほとんどない金沢医大から七三一部隊に弟子を送り出せたり、石井に金沢医大に講演に来てもらうことができたりというのは、それなりに強い個人的関係が存在していたことを物語る傍証といえよう。

二木で留意したいことはもう一つある。それは、史料8によれば、彼が四月一七日段階で東京牛込の陸軍軍医学校にいた点である。彼はその後すぐに金沢に来る。そのことを示すのが史料10の電信で、宛先が金沢医大の谷友次気付となっている。二木は石井を迎えるために金沢に来たのかもしれないが、この事実は、二木のような七三一部隊の中核研究者が、ずっと旧「満州」にいたのではなく、時には軍医学校や出身大学の研究室に顔を出し、日本と旧「満州」を行き来していたことを窺わせるのである。なお、史料10からは、石井の金沢行きが急に決まったために寝台車の切符が取れず、軍の力で確保しようとしている様が看取できる。

こうして決まった石井の日本文化講義であるが、先に紹介した四月一八日付の教学局指導部長からの電信によれば、計画変更のことを至急回答しなければならなかった。そこで一八日に急ぎ作られたのが、史料11の実施計画変更の届出文案と史料12の電信案とみられる。史料11には予算書が別紙として付けられていたはずで、先の史料4はその予算書案とみてよかろう。なお、史料13の「曩ニ」以下は電信案に書かれたメモ書きである。

また、史料7に依れば、金沢師団の軍医部にも講演を聞かせたい意向が石井の側にあった。それを受けて作られたのが史料13の軍医部長宛の日本文化講義開講の連絡文書案である。追伸で、石井の日程も連絡しているが、軍医部側が石井と会いたいであろうとの配慮と考えられる。作成月日は不明だが、史料11と比べると空白の講義時間に「三」の記入があるから、史料11の作成より後と考えてよかろう。

史料14・15は、二一日の日本文化講義の実施状況を伝える史料である。どちらも手書きで、史料14は史料15の「聴講学生生徒出席率」のもととなったもの、史料15は文部省

に出す報告書の原案と考えられる。日本文化講義は通常二時間だが、史料15によれば、石井のそれは異例の四時間であった。出席者総数は六七〇名前後と大規模で、軍医部に連絡した関係で通常よりも一〇〇名ほど多くなったようである。演題「大陸ニ於ケル防疫ニ就テ」は、これ以前の文書には演題未定とあるから、当日発表となったのであろう。講義要旨からは、石井が映画を使いながら、「満州」や中国戦線での防疫・給水について実地体験に基づいて解説した後、逼迫した世界情勢を論じ、国家総力戦に勝ち抜く上での医学の重要性を学生たちに説いたことがわかる。ただ、彼はその中で当時機密であったノモンハン戦にも触れたようで、要旨原案に一端書かれたものの、後から削除の線が引かれている。当然、実際の報告書では削られたとみてよい。

注目したいのはその出席者である。史料14及び史料15の「聴講学生生徒出席率」は八〇%以上と高率なのだが(22)、その数値計算は「台鮮支」つまり台湾・朝鮮の植民地学生と中国からの留学生を除外して出されている。本稿では紹介しないが、『文化講義関係書類』には出席者に〇をつけてチェックした名簿が「出席調査調」の名称で収録されている。この名簿では、台湾・朝鮮の植民地学生と中国からの留学生には最初から線が引かれており、彼らの聴講は最初から許されていなかったことがわかる。石井以外の日本文化講義で植民地学生や留学生が除外された事例はなく、これは極めて異例なことなのである。

その事情と理由は判然としない。講義前の石井側との遣り取りの中に彼らを除外せよとの指示はなく、指示があったとすれば、石井が金沢に来て演題が確定した段階、つまり講演直前だった可能性が高い。石井の講義には機密事項であるノモンハン事件が出てきているが、それを話す予定だったことが除外の理由である可能性もある。しかし、石井及び大学側に機密との認識がきちんとあれば、日本人学生にも話すべきではないし、たとえ下書きであろうとも報告書案にノモンハンの文字は書かれないであろう。それよりは、中国戦線の話をする予定であったことは確かなので、それが中国人留学生や台湾人学生を刺激する可能性があって除外したと考えた方がよかろうが、この場合でも朝鮮人学生が除外される理由は明瞭ではない。当時、権力側には朝鮮人を危険分子と見る認識が一般に存在したから、それで石井側が彼らに中国戦線の映像や話を見聞させたくないという意向を持ったと推測するのが最も妥当であろうか。

史料16から18は実施後の礼状文案、史料19は石井からの

実施後のお礼電である。史料16は光島学生課長から二木秀雄宛の礼状文案で、二木の仲介が再確認できるとともに、再度彼を仲介役に石井の揮毫及び学生生徒の講演感想文の手渡しを依頼している。特に学生生徒に感想文を書かせた事実は注意すべきで、講義の教育効果をあげるためと、文部省への報告事項である「講義が学生生徒に与えた影響」を書く資料にするための二つの目的で行われたと推定してよかろう。また、宛先住所が「満州第七三一部隊」とある点も注意すべきで、史料11に石井四郎の肩書きが「関東軍石井部隊長」とあることとも合わせて、その職務内容は知らないにしても、当時の医学部関係者にとって七三一部隊の存在自体は秘密事項でも何でもなかったことを物語っているといえよう。

史料17・18は日付がないが、案一・案二とつながっているので同一月日に書かれたもので、史料18に「去ル二十一日」とあるから、どちらも四月中と判断してよかろう。史料19の石井のお礼電は五月一日付だから、史料18に基づくお礼が届いての電信と判断してよかろう。とすれば、史料16は六月四日とかなり後なので、これは礼状としての性格よりも依頼事項の方に主眼があったと判断してよかろう。

以上、石井四郎が一九四一年四月二一日に金沢医大で行った日本文化講義関係の史料を解説してきたが、金沢大学医学部所蔵金沢医大資料の中にはもうひとつ七三一部隊関係史料群が存在する。それは、七三一部隊員石川太刀雄の金沢医大赴任に関係する史料群である。しかし、紙数はもはやない。別稿で紹介することとし、読者の寛恕を請う次第である。

五、史　料

以下の一九点の史料は、できるだけ本来の体裁がわかるように紹介するが、石井に直接関係しない部分は比較上の必要性がない限りは省略した。また、文字が判読不明な場合は■、印や判の場合は文字囲で表した。史料のうち、書類ではないメモ・電報の類は、その旨を史料番号の下にカッコ書きで記した。

史料1

昭和十六年度日本文化講義実施計画書

実施予定	実施希望講義内容	希望講師官職名	時間数	備考
昭和十六年四月二十一日	大陸ニ於ケル防疫ニ就テ	陸軍軍医学校教官陸軍軍医少将石井四郎	四	本学ニ於テ交渉

（以下略）

史料2（昭和十六年度日本文化講義実施計画書に糊付けされたメモ）

〈一枚目〉

石井少将ノ分（待合せ時間ヲ含ム）

驛―宮保	三台	二円六〇	一台 一円 一台―・九〇 一台― 七〇
宮保―大学	一台	一円二〇	
計		三・八〇円	

光島

〈二枚目〉

盛菓子	貳盛	三・三〇〇円	
茶	壹斤	二・〇〇〇円	

光島

史料3

昭和十六年度日本文化講義経費予算書

一、諸給 一六五・〇〇〇円

内訳

（イ）石井講師謝金

陸軍軍医学校ヨリ派遣ニ付特ニ謝金ヲ贈呈セズ但シ雑費ハ之ヲ計上ス

		円
講義手当	一時間十五円 二時間分	三〇・〇〇〇
日当	甲二日分	一六・〇〇〇
宿泊料	甲一夜分	一二・〇〇〇
鉄道賃	大阪―金沢（含通行税）	一九・八〇〇
	急行料（含急行税）	七・二〇〇
	計	八五・〇〇〇

（ロ）池崎講師謝金

講義手当	一時間十五円 二時間分	三〇・〇〇〇
日当	甲二日分	一六・〇〇〇
宿泊料	甲一夜分	一二・〇〇〇
鉄道賃	法隆寺―金沢	一七・五〇〇
	急行料	二・八〇〇
	計	七八・五〇〇
	切上	八〇・〇〇〇

二、雑費　一九・一〇〇円

内訳

自動車代
1．石井講師並ニ同随員送迎用　三・八〇〇円
並ニ活動写真映写器運搬用
2．池崎講師送迎用　二・五〇〇
3．佐伯講師送迎用　二・五〇〇

茶菓代
1．石井講師並ニ同随員接待用　五・三〇〇
2．池崎講師接待用　二・五〇〇
3．佐伯講師接待用　二・五〇〇

計　一九・一〇〇

合計　一八四・一〇〇

備考　石井講師ハ随員トシテ陸軍技師二人、活動写真技術員三人ヲ同伴セリ

史料4

昭和十六年度日本文化講義経費予算書

一、諸給　二七五・〇〇〇円

内訳

（イ）石井講師謝金

講義手当	一時間十五円	二〇・〇〇〇円	
日当	二時間分	甲三日分	二〇・四〇〇
宿泊料		甲二夜分	二〇・四〇〇
鉄道賃	東京―金沢（含通行税）		二三・二〇〇

急行料　（含急行税）　四・四〇〇
計　九八・四〇〇
切上　一〇〇・〇〇〇

（中略）

二、雑費　一五・〇〇〇円

内訳

自動車代
1．石井講師送迎用　二・五〇〇
2．池崎講師送迎用　二・五〇〇
3．佐伯講師送迎用　二・五〇〇

茶菓代
1．石井講師並ニ同随員接待用　二・五〇〇
2．池崎講師接待用　二・五〇〇
3．佐伯講師接待用　二・五〇〇

（以下略）

史料5（昭和一六・四・一六付電報）

タカセウマチ六」
タニトモシ
ナイタクヲエタガ　アスカクテイスル　ニ一ヒツクヨテイ
フタキ

史料6（昭和一六・四・一九付電報）

イシザカシンキチ殿
ゴショーデンニヨリ二一ヒ　ゴゼン七ジニ六ツク」イシイ

史料7（メモ）

石井少将招ヘイノ件

光島　軍医学校長

桃井閣下ニ、石井君派遣ノ件懇請（至急電報デ）

一、二十一日午前七時二六分着ニテ一行来着（京都ヨリ）

一、人数（宿舎）

石井君ノ将校■名

技術官　四名

一、講演ハ二十一日午后■～二十二日中

（二十二日午后八時帰京）

一、軍医部ノ連中ニモ一所ニ見セタシ

一、■ノ■■■ハ大■■陸病ニテ用意

史料8

電信案

四月十七日

学生課長（ミッシマ）

東京牛込区（トウケウウシゴメク）　陸軍軍医学校（リクグングンイガッカウ）　防疫研究室（バウエキケンキウシツ）

陸軍技師（リクグンギシ）　二木秀雄（フタギヒデヲ）

校長宛依頼電出シタ（カウテウアテイライデンダシタ）」　御配慮ヲ謝ス（ゴハイリョヲシヤス）

史料9

電信案

四月十七日

金沢医科大学長（カナザワイカダイガクテウ）

東京市牛込区（トウケウシウシゴメク）

陸軍軍医学校長（リクグングンイガクカウテウ）

（陸軍軍医中将（リクグングンイヂウゼウ）　桃井直幹宛（モヽノキナオミキ））

本学（ホンガク）日本文化講義講演（ニホンブンカコウギコウエンクワン）官トシテ石井四郎（イシヰシラウ）

軍医少将（グンイショウセウ）ヲ本月（ホンツキ）二十一日（ニヽヒ）本学（ホンガク）ニ御差遣（ゴサケンカタ）方

御承認願度（ゴショウニンネガヒタシ）シ

史料10（昭和一六・四・二〇電報）

一三二

一二〇　ケウト　五二一五　コ六、八

カナザワシ」

カナザワイカダイガク

ナイ」

ガクサイキンガクキョウシツ

タニトモチ　キヅケ

フタキ　ギシ殿

オガタシラハタイチョウトトモニノラル」カツカシンダイケン

ハツバイエキゼンブニテハイセシモミナウリキレヌコノウエ

ハタイチョウメイシヲダシカナザワエキチョウマタハダイガ

クグンブナドニヨリトクニイライスルホカナシ」ハヤカワ

コ六、二四、八一

史料11（昭和一六・四・一八起案）

石井陸軍軍医少将日本文化講義ニ関スル件

案一

金大生第　号

年月日　学長

教学局指導部長　宛

本年度本学日本文化講義実施計画ニ関シテハ本月七日附金大生第八八号ヲ以テ講師予定表ヲ添ヘ及申請置処、都合ニ依リ今回急ニ一部変更シ講師トシテ陸軍軍医学校教官兼関東軍石井部隊長石井四郎軍医少将ヲ招聘ノコトニ本学ニ於テ講師ノ内諾ヲ求メ来ル二十一日（月曜日）左記ノ通リ講義開講可致候、御承認相成度候也

追テ本月七日附発指一五号御通牒ニ係ル経費予算書ハ別紙ノ通リ訂正及送付候条可然御取計相願ハシ度此段併テ御依頼申上候也

記

一、開講日時

四月二十一日（月曜日）午後一時ヨリ凡　時間

一、演題並講師

演題　未定

陸軍軍医学校教官兼関東軍石井部隊長

陸軍軍医少将　石井四郎

一、講義室

金沢医科大学大講堂

一、聴講者
本学学生、研究科学生、専攻生、医学並
薬学専門部生徒、本学職員等凡八百名トス
以上

史料12
電信案
金沢医科大学々生主事
文部省教学局高木指導課長宛
本年度本学第一回日本文化講義講師トシテ」
陸軍軍医学校教官兼関東軍石井部隊長　石井四郎
軍医少将ヲ招聘シ」本月二十一日講義開講改度
何分ノ儀至急電信ニテ回答セラレタシ

曩ニ諸御予定表
ヲ提出セルモ都合ニ
依リ急ニ一部変更シ
本案ハ施行セズ

史料13
案
年月日　学生課長
金沢師団軍医部長宛
拝啓益々御多■奉賀候　陳者今回本学ニ
於テ左記ノ通リ日本文化講義開講可致之処
貴部貴中御希望ノ向ハ御来聴差支無之
ニ付此段御通知申上候也
追テ石井軍医少将ノ御旅程ハ来ル二十一日午前七
時二十六分金沢駅着、同夜宮保旅館宿泊
二十二日午前八時九分当地発御帰京ノ予定
ニ有之候条為念申添候
一、開講日時
四月二十一日（月曜日）午後一時ヨリ凡三時間
一、演題並講師
演題　未定
陸軍軍医学校教官
関東軍石井部隊長　陸軍軍医少将石井四郎
一、講義室
金沢医科大学大講堂
一、聴講者
本学学生、研究科学生、専攻生、医学並薬学
専門部生徒、本学職員等凡八百名トス

史料14

第一回日本文化講義出席状況調

	学年	総数	台鮮支	差引総数	欠席率	出席数	出席率
大学	一年	七一	二	六九	八	六一	八八・四一
	二年	五九	二	五七	一八	三九	六六・四二
	三年	五七	一	五六	七	四九	八七・五〇
	四年	五八	〇	五八	六	五二	八九・六六
		二四五	五	二四〇	三九	二〇一	八三・七五
専医	一年	六四	三	六一	二	五九	九六・七二
	二年	六二	四	五八	二	五六	九六・五五
	三年	五一	五	四六	一	四五	九七・八三
		一七七	一二	一六五	五	一六〇	九六・九七
専薬	一年	四四	三	四一	二	三九	九五・一二
	二年	四〇	〇	四〇	三	三七	九二・五〇
	三年	四四	〇	四四	三	四一	九三・一八
		一二八	三	一二五	八	一一七	九三・六〇

史料15

第一回日本文化講義情況報告書

一、講師及演題

講師　陸軍軍医学校教官
　　陸軍軍医少将　石井四郎

演題　大陸ニ於ケル防疫ニ就テ

二、講義日時及時間数

昭和十六年四月二十一日(月曜日)　自午後一時　至午後五時　凡四時間

三、講義要旨

大陸ニ於ケル防疫ニ就キ活動写真映画ヲ併用シ、新京ペストノ撲滅、南支及中支ノ防疫ト給水マラリヤ細菌運動等ニツキ解説シ、更ニノモンハン戦、三国同盟締結調印式等ノ実況ニ付演者ノ体験ニ基キ詳細ニ叙説シ、民族心理ト戦争ノ原因、英米、独伊、蘇聯等各国家ブロック形成ト帝国ノ八紘一宇ノ大精神ヲ基調トスル共栄圏ノ確立、戦線六千粁ニ亘ル支那事変ノ現況、逼迫セル日米関係ト日米戦争ノ規定及日蘇国交調整ノ今昔ニ就テ述ベ、今日ノ戦争ハ唯ニ鐵ト火薬ト人ニ依ル戦争タルノミナラズ、アラユル物質ト人トヲ動員セル国家総力戦デアリ一億乃至数億ヲ単位トスル

民族ノ持久戦デアリ、而モ人的資源ガ最モ大
切デ人ノ質ガヨケレバ戦ハズシテ勝利アリ、之ヲ
日本医学百年ノ昔ニ顧ミルトキ軍ノ要求ハ
科学ノ一切ヲ挙ゲテ国策ニ順応セシメ人ノ
質ヲヨクスル即チ強兵ニアリトナシ、予防、治療
防寒、防熱等々長期持久戦ニ耐エ得ル途ヲ拓
クハ日本医学ノ重大使命ナルガ故ニ医学薬
学ヲ専攻シツヽアル本学学生生徒諸氏ハ現下
時局ノ愈々重大ナルヲ理解体認シ、自分達ガ
国家ヲ背負ツテ立チタルトキ如何ニスヘキカ其
ノ使命ト責任ノ重大ナルニ徹シ堅キ決意ト
真剣ナル努力ヲ以テ科学ノ研鑽ニ励ミ聖
戦目的完遂ノ為各自実力養成ニ邁進スヘシ
ト結論セルモノナリ

四、聴講学生生徒出席率

聴講者／出席率	出席者数	欠席者数	出席率
大学学生	二〇一	三九	八三・七五
付属薬学専門部生徒	一一七	八	九三・六〇
附属医学専門部生徒	一六〇	五	九六・九七

（備考）
本表以外ニ本学研究科学生、専攻生、本学
職員、金沢師団軍医部々員等凡二
百名聴講セリ

五、学生生徒ニ与ヘタル講義ノ影響
演者ハ大陸ニ於ケル防疫並ニ諸兵ノ勇猛果敢
ナル戦闘ノ実況ニツキ其ノ体験ニ基キ映画ヲ
併セ詳細ニ亘リ頗ル熱烈ニ解説セラレタルニヨリ
学生生徒ハ終始敬虔ノ念ヲ以テ謹聴シ現下ノ
緊迫セル時局ノ重大性ヲ深ク理解セルモノヽ如ク
事変ノ将来ニ処スル精神強化ト実力修養
上大ナル刺激ト深キ感銘ヲ与ヘタルモノト認ム
以上

史料16

拝啓益々御多祥奉賀候　陳者先般石井閣下
本学日本文化講義の為御来学の節は種々御配
慮に預り有難く奉存候　諸事好都合に運び洵に
有益なる御講義聴講仕り深く感謝罷在候
厚く御礼申上候　然る処此の上の御願にて誠に
乍恐縮本学にては先年来、日本文化講義を賜は

りたる講師諸先生より学生生徒訓育資料として
記念御揮毫御願申居候については閣下の御余
暇の折に何なりと適宜御揮毫賜はり候様特に
貴台より御依頼被下度御願申上候　右用桟
として本日別便にて色紙一葉御届申候　御用繁
中乍御手数何分よろしく御願い申上　先は右御礼
に併せ重ねて御願申上げ乍末筆時下御自愛
祈上候
敬具
追白、石井閣下の御講義を聴講せる学生
生徒所感の一部本日別途郵送仕り閣下に
御手渡し下され御高覧賜はり候はば幸甚に
奉存候
昭和十六年六月四日
学生課長名
陸軍技師　二木秀雄宛
満州国浜江省
ハルビン満州第七三一部隊
陸軍技師　二木秀雄殿

史料17

石井軍医少将宛礼状案

拝啓愈々御清康奉慶賀候
陳者今回ハ突然御難題御願申上
候処軍務格別御多端ナル折柄ニモ不
拘本学日本文化講義ノ為遠路態々
御来学賜ハリ洵ニ辱ク奉存候
貴キ御体験ニ基キ大陸ニ於ケル防
疫並ニ諸兵ノ勇猛果敢ナル戦闘ノ
実況等映画ヲ併セ詳細ニ亘リ現下
特ニ重要ナル御講義賜ハリ聴講者一
同ハ終始敬虔ノ念ヲ以テ謹聴仕リ緊
迫セル時局ノ重大性ヲ深ク理解スル
ヲ得、特ニ学生生徒ハ事変ノ将来ニ
処スル堅忍不抜ノ精神並ニ実力修養
上大ナル刺激ト深キ感銘ヲ覚エ申候
段深ク感謝罷在候　茲ニ乍略儀以
書中厚ク御礼申上候先ハ右御挨拶
迄乍末筆時下邦家ノ為一層ノ御
自愛奉祈上候
敬具
年　月　日
学長

陸軍軍医少将　石井四郎宛

史料18

案二

拝啓益々御多祥奉賀候
陳者今回本学日本文化講義ノ為講
演官トシテ石井四郎軍医少将御差
遣方御依頼申上候処御承諾賜
リ辱ク奉存候　予定ノ通リ去ル二十
一日本学ニ於テ「大陸ニ於ケル防疫ニ
就テ」ト題シ洵ニ有益ナル御講義
賜ハリ医学並ニ薬学ヲ専攻セル本学
学生生徒ハ申スニ及バズ聴講者一同
ハ時局ノ重大性ヲ深ク理解スルヲ得
事変ノ将来ニ処スル精神強化ト
実力修養上多大ノ刺激ト深キ
感銘ヲ覚エ申候　茲ニ乍略儀
以書中厚ク御礼申上候　先ハ右
御挨拶迄時下邦家ノ為御自愛ノ
程祈上候
年　月　日　学長　敬具

陸軍軍医学校長
陸軍省医務局長　宛

「東京市牛込区
陸軍軍医学校
陸軍軍医中将　桃井直幹閣下
東京市麹町区
陸軍省医務局長
陸軍軍医中将　三木良英閣下」

史料19（昭和一六・五・一付電報）

セ
ウリ　五　ハルヒンナンコウ　一二四　七三〇　一一一〇・〇
カナザワ」
イカダイガク」〇〇〇〇九
イシザカガクテウ殿
時間外受付　通常軍用官報
ウナリク
キンチシユツテウノサイノゴホウシヲシンシヤスキヨウジユカ
クイニヨロシクゴデンゲンヲコフイシイシロウ
錦地出張ノ際ノ御芳志ヲ深謝ス　教授各位ニ
宜敷御伝言ヲ請フ　石井四郎
セニ　一五　五六

註

（1）ここでいう金沢医科大学とは、現在の金沢大学医学部医学科（組織上は医学研究科医学専攻）の前身で、一九二三年四月に金沢医学専門学校から大学に昇格した旧制の官立大学である。現在、石川県内灘町にある金沢医科大学とは別の学校であり、系譜的な関係もない。

（2）調査は、その大半を金沢大学五十年史編纂室助手の谷本宗生氏（当時）と、うち二回を金沢大学経済学部教授・鶴園裕氏とともに行った。その間、両氏には貴重な助言をいただいた。また、調査に当たっては金沢大学医学部医学科総務係の職員諸氏にたいへんお世話になった。ここに記して謝意を表する次第である。

（3）とりわけ日本文化講義、興亜青年勤労報国隊、戦時留学生などの史料は注目に値する。その一部は『金沢大学五十年史／通史編』で紹介したが、後日機会があればあらためて紹介したい。

（4）戸籍名は「石川太刀雄丸」。本人の弁によると、「丸」は出生届の際、富山県射水郡下村の戸籍係が誤って付けたもので、自らは「石川太刀雄」と称した（『金沢大学医学部百年史』一九七二年、四九五頁）。戸籍係の誤りは、父・石川日出鶴丸の「丸」に影響されたものと考えられる。本稿では彼が正しいとした「石川太刀雄」でその姓名を表記する。

（5）石川の七三一部隊での活動や病理標本引き渡しの経緯等については、常石敬一『医学者たちの組織犯罪－関東軍七三一部隊』（朝日新聞社、一九九四年）参照。

（6）常石註（5）前掲書参照。なお、同書二四四頁の嘱託研究者リストでは、谷の当時の肩書きを「金沢医大付薬専講師」と記すが、これは兼務であり、本務ではない。常石は『現代日本科学技術者名鑑』（文部省監修、科学文化新聞社編、一九四八年。筆者未見）からこのリストを作成しているので、この名鑑に誤記があったか、常石が兼務を本務と誤解したかのいずれかであろう。

（7）金沢大学という枠組みで七三一部隊との関係をみると、初代学長となった戸田正三は元京大医学部長で、陸軍軍医学校の嘱託研究員となり、京大からの若手研究者送り出しの中心であっただけでなく、戦後も日本学術会議会員として七三一部隊追及を阻む役割を果たしたことが知られている。また、部隊長・石井四郎は金沢大学の前身校の一つである旧制第四高等学校の出身であった。

（8）『文化講義関係書類』は昭和一六年度以降の日本文化講義、及び昭和二〇年度後半から昭和二一年度の文化講義に関す

る書類をまとめた簿冊である。日本文化講義については、もうひとつ『日本文化講義　自昭和十四年度至昭和十五年度』という簿冊がある。

(9)『金沢大学医学部百年史』（金沢大学医学部創立百年記念会、一九七二年）三二八～三三一頁。石井四郎が講義をしたことは三三一頁に記されている。

(10)安岡寿之輔「名古屋大学（第八高等学校）教育の戦争責任」（『日本の近代化と戦争責任―わだつみ学徒兵と大学の戦争責任を問う』明石書店、一九九七年）、中村治人「日本文化講義に関する通牒と実施要綱―名古屋大学経済学部所蔵「日本文化講義」関係史料について―」（『名古屋大学史紀要』八、二〇〇〇年）。なお、中村論文には、従来の日本教育史の諸資料集は日本文化講義についての資料が不完全で解説に誤りがある旨の指摘がある。

(11)『金沢大学五十年史／通史編』二九一～二九四頁。

(12)ただし、回数はその後の要綱では減少しており、金沢医大のような官立大学は年三回となった。このことについては『金沢大学五十年史／通史編』二九二～二九三頁参照。

(13)金沢医大・第四高等学校・金沢高等工業専門学校等の金沢大学前身各校における日本文化講義の実施状況については『金沢大学五十年史／通史編』二九二～二九三頁参照。なお、金沢医大の実施状況については『金沢大学医学部百年史』三三〇～三三一頁にも記載があるが、昭和一四年度・一五年度の講義題目・講師は実は昭和一三年度・一四年度のもので、一年のずれが生じ、昭和一五年度日本文化講義の本当の講義題目・講師が欠落している。

(14)安岡註(10)論文では、日本文化講義の必修科目化を「前わだつみ世代」と「わだつみ世代」を分けるメルクマールとしている（安岡註(10)著書一八六頁）。

(15)筆者の本電信の写し書きでは、電文が「講義」で終わっており、不自然である。また、この電文の上にメモ書きとして「至急電信ニテ回答セラレタシ」とある。電文は一部切れていて、それをメモ書きで補って簿冊に綴じたのかとも思われるが、筆者の写しミスの可能性もあり、今後の再調査が必要である。

(16)青木保の金沢医大における日本文化講義は、翌一九四二年一一月五日に「現大戦ノ兵器」という題で実現している。

(17)跡地は片町パーク24という駐車場になっている。

(18)『金沢大学医学部百年史』六二二頁には微生物学教室の教官録があり、二木秀雄の在職期間が「昭和一一年三月三一日」から「昭和一二年一二月二二日」であったことが確認できる。また、金沢大学医学部所蔵金沢医大資料の『昭和

の意味では少し率が低い。急遽実施したためと判断してよかろう。

（金沢市弥生二―一二―六）

十二年教授会関係書類』の「昭和十二年十二月二十日定例教授会記事」には、石坂伸吉学長が、「細菌学助教授ニ代フベキ講師嘱託ニ関スル件ヲ附議ス。本件ハ現講師二木秀雄氏辞職願出タルニ付、谷教授ノ申立ニ依リ」後任者を嘱託したいが異議はないか、と発言したことが見える。

(19) 金沢医大資料には彼が陸軍技師に任官した記録はなかったので、辞職後すぐか、一旦別の職に就いた後で陸軍技師になったかは不明である。『第四高等学校同窓会会員名簿昭和十三年度版』（一九三八年一二月）には、彼の現職が「福井県学校衛生技師」と掲載されているが、住所が空白で、続く昭和一五年度版の同窓会名簿には現職も住所も空白となっている。それ故、「福井県学校衛生技師」の信憑性は十分とはいえない。

(20) 『金沢大学医学部百年史』別冊の『学位録』一六頁には、二木秀雄が昭和一三年度に、「家兎神経系徴毒ニ於ケル脳髄ノ組織等検索」で医学博士（二三一号）となったことを載せるが、その時の所属教室も「細菌学―谷―」と記されている。辞職後も二木が谷の指導を受けていることを示す記事である。

(21) 『第四高等学校同窓会会員名簿』による。

(22) 日本文化講義は通常九〇％以上の学生が聴講しており、そ